

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

無料

第34号

毎月発行

創刊2015年(平成27年)3月16日 月曜日

2015年(平成27年)3月16日 月曜日

これからの東北大震災復興の在り方を根本的に見直す インフラが復旧・復興したら、大震災からの復興が本当に実現したと自信をもって言えるのか？

復興の枠組は本当にこれでいいの？

東北大震災発生から四年目の三月十一日、TVや新聞、その他メディアによる特番や特集であふれた。どの局も、どの新聞も、どのメディアも、復興遅れ指摘に始まる定番の枠組づくりであり、それらを山ほど見せつけられるとさすがに閉口する。型通りの感情の押し売り、押しつけをされている気分になる。そして中味はほとんど希薄化し、形が美化していき、同時に重要な問題がスリリと抜け落ちていくのを感じる。

一方、被災地現地では怒りと悲しみが渦巻いている。復興の大幅遅れに対する怒り、被災地だけが取り残されている孤立感という

だち、浅薄なマスメディアへの怒り、無関心な人々への複雑な感情、時間が経過しても消えない悲しみ、出口が見いだせない閉そく感、将来への不安、四年間もの避難生活で疲れ切った心身、震災後四年も経つとさまざまな負の感情が渦巻き、ものすごいエネルギーに膨張しているに違いない。

このギャップを何とかしなければならぬ。百も承知のことである。

しかし本当にそれだけでいいのだろうか。被災者からすれば、まずは復旧・復興を優先してからのものを言えと叱責されそうだが、言わずにはいられない。

被災者も国民もメディアも、何か大事なことを忘れてはいないだろうか。真正面から取り組むべきことがあるのに、復旧・復興の遅れにまつわる事柄で、本筋の課題から逃げてはいないか。課題の優先順位を取り違えていないか。そんなことを考える四年目を迎えた筆者である。

震災で破壊されたものを再考する

筆者は、震災発生後約半年間、津波と福島第一原発の映像と特集を、毎日毎日、

夜から深夜にかけて見続け、目と耳に焼き付けた。その後遺症なのかもしれないが、その間に震災で壊されたものが何なのか自分なりに掴めたと思った。

日頃信じてきた価値観、生活をする上で最終的な拠り所となる精神基盤や、多少の問題はあっても人間の進歩は揺るぎがないという思い込み、日本は自然災害の多い国だが科学技術の進歩である程度は克服出来ているという根拠なき自信など、震災で形もなくなき端微塵となった。

そして自然とは人間が予想も出来ないようなパワーを持ち、予想もできないことを実現できることを徹底的に思い知らされた。思い上がった現代日本人の根拠なき自信を打ち砕いた。

原点がしの旅開始

しかしいつまでも自信喪失状態のままではいられない。生きていくために最低限必要な自信を取り戻すため、原点に立ち戻る必要があると思いつき、原点がしの旅を開始した。

まず、どんな過去に遡って行く方法を選択した。どこで「道」を誤ったのかを検証するためだった。貞観地震が話題になったので、そこを調べてみた。しかし記録が少ない。不完全で断片的な地震の記録しかない。

他に大地震を調べるとたくさんあった。そんなに遠く



香取神宮

くない昭和にあったし、明治にもあった。忘れていただけで、貞観まで遡らなくとも大地震に学べるのだ。

また同時に、復旧・復興が遅れる原因に東北の歴史が関係するのではないかと考え、東北の歴史を遡っていった。明治維新前後、特に戊辰戦争、江戸時代と遡り、平安初期まで遡った。

そこではアテルイに代表される蝦夷と蔑まれた東北の民を見た。しかしそこに最終的な答えはなかった。

もうひとつの方法が、震災直後の被災地で、衣食住もままならない状況なのに、もかかわらず復活を望まれた郷土芸能のルーツ探しがあった。

郷土芸能といっても、単なる祭りではなく、被災地の神社に奉納されていた伝統的な芸能であり、宗教色の強いものである。

井戸尻考古館訪問

先日、長野県にある井戸尻考古館という縄文土器コレクションでは有名な場所を訪ねた。



縄文土器 半人半蛙

聞きしたところ、東北大震災以来、単に縄文土器の知識を得るために来館されるというより、震災後の生き方を模索しておられる方が多くなったという。

縄文土器と震災後の生き方見つけ直しという奇妙な取り合わせではあるが、筆者だけが変りものではないことを知り少し安心した。

井戸尻の縄文土器はその文様から、特に宗教色が強いことが感じられる。そのためか、そこに答えがあると感じる方々がおられるのだ。そして縄文からのメッセージは解読中である。

震災からの復興に宗教問題は避けて通れない

誤解を恐れずにあえて言おう。真の復興のためには価値観の大転換が不可欠であり、特に現代日本人が失

った宗教意識の再確認あるいは復活が必要ではないかと思うようになった。(くれぐれも特定の宗教・宗派のことを言っているのではないことをお断りしておく)

震災で破壊された現代日本人の大半が共有する価値観が占めていた場所は今は空白となつてしまつたが、そのことを無意識に皆が感じていると思う。だからこの価値観大転換であり、宗教意識の復活である。

その点で最近開始した神社巡りの旅はいろいろなことを教えてくれる。

まずは、日本が無宗教の国という思い込みは神社巡りの旅であつたりと覆った。日本人ほど宗教を求めて、実践している国民はいないと思うようになった。

そして震災以来、宗教を求めている人が多くなった



東北大震災4年目イベント：飛梅 神田店

と感じられることである。

四年目イベント参加

三月十一日にはさまざまな四周年目のイベントがあったが、たまたま以前から知っていた飛梅の神田店でのイベントを取材した。

この店は三陸の牡蠣を売りものにして居る居酒屋である。イベント開始前に到着して仙台本店の社長さんや幹部の方々、石巻の酒造メーカーの社長、牡蠣生産者や流通業者の方々との話のなかで、震災直後に一メートル以上沈下した岸壁が最近五〇センチ以上上昇して、かさ上げした岸壁に階段を付けたいと移動が困難になっているという。ここにもまだ自然を克服できるという思い上がりが見えてならない。

第10回三陸酒海鮮会 日本橋開催 (2/12)

記念すべき10回目
満員大盛況御礼申し上げます

記念すべき第十回目の三陸酒海鮮会・日本橋開催は二月十二日に、日本橋水天宮前にある会場の「ささや」で開催されました。

今回は、一月の新年会ラッシュも終わったところでもあり、満席の大盛況となり、店内はほぼほし詰め状況となりました。

参加者は、ご常連さんを中心に、知り合いの知り合いという新規参加者の方々が多数いらつしやいました。どんどん支援の輪を広げていただきたいと思えます。

オーナーからは、毎回、当日供される三陸の地酒の説明がありますが、今回は特に岩手・盛岡の赤武酒造の「赤武」(あかぶ)が紹介されました。赤い兜のラベルが特徴で、今回初お目見えですが、とてもおいしかったです。



三陸地酒ラインアップ



水産業再興のための料理レシピ紹介

第7回目

【カニと胡瓜の酢の物とカニ雑炊】



郷土料理愛好家
松本由美子氏



カニと胡瓜の酢の物

カニ料理が嫌いな人は非常に少ないでしょう！ 写真を見るだけで食べたくなってしまいます。ぜひこのレシピで料理に挑戦してみてください。



毛ガニ剥き身



毛ガニ

作り方(カニと胡瓜の酢の物／カニ雑炊)

カニと胡瓜の酢の物

- ① 酢90g、出し汁65g、ガムシロップ18g 合わせる。
- ② カニを剥き、胡瓜は輪切りにする(塩を軽く振りかけておく)
- ③ レモンを飾り、盛り付けをします。

カニ雑炊

- ① 白ご飯は流水で洗ってザルにあげておく。
- ② 鍋に昆布だしと鰹だし、薄口醤油、塩を入れて火にかけ、温まったらネギ、ほうれん草を加え数分火を通す。
- ③ 鍋にご飯とカニを入れて2～3分沸騰直前まで煮る。
- ④ 溶き卵を入れて少し固まってきたところをぐるりとまぜ、卵が好みの固さになったら出来上がり。



カニ雑炊

伝統野菜の可能性

東北の伝統野菜

日本の各地には伝統野菜がある。この伝統野菜、在来作物とも地方野菜とも呼ばれ、最近注目されることが増えてきたように思う。伝統野菜について明確な定義は今のところないが、概ね各地で古くから栽培・利用されてきた野菜の在来品種のことを指すようである。明確な定義はないと書いたが、例えば秋田県では伝統野菜について、①昭和30年代以前から県内で栽培されていたもの、②地名、人名がついているなど、秋田県に由来しているもの、③現在でも種子や苗があり、生産物が手に入るもの、の3つの事項を満たす品目を伝統野菜と位置づけている。また、山形県では、①その地域で栽培・利用されてきた固有の野菜、穀物、果樹など、②自家採種により品種、系統が維持されてきたもの、③年代は概ね昭和20年以前(戦前)から栽培さ

れているもの、④現在、種子や苗が手に入るもの、を基準としている。

この伝統野菜、京野菜や加賀野菜などは特に有名だが、それ以外にも全国各地にあり、もちろん東北各県にも数多くの伝統野菜が存在している。定義が定まっていないために、正確に何種類あるのか把握するのは難しいのだが、私が調べてみたところでは、名前が確認できる伝統野菜が、少なくとも青森県には26、岩手県には30、宮城県には20、秋田県には38、山形県には140、福島県には50はあることが分かった。

ただ、例えば山形県には、一説には160ほど伝統野菜があるとのことなのだが、実際にはもっと多くの伝統野菜があることになるのだが、残りについては見つけられなかった。ちなみに、山形県のホームページで紹介されている山形県内の伝統野菜は71種類である。それ以外にも恐らく生産量

が極端に少ない、自家消費のみで市場に出回らないなどの理由で見つけにくい伝統野菜が相当数あるようである。

一般に流通している野菜との違い

この伝統野菜、スーパーマーケットなどで見掛けるような、現在一般に流通している野菜とは成り立ちが異なる。現在流通している野菜は、そのほとんどが「F1品種」と呼ばれるものである。「F1品種」とは「雑種第一代」または「一代交配種」とも言う、交配によって作られた新しい品種の一代目のことである。異なる性質をかけあわせると優性だけが現れるメンデルの「優性の法則」を利用して、異なる性質の種を人工的に掛け合わせて、まったく同じ性質の野菜ができるように品種改良されたものがこの「F1品種」である。

「F1品種」は生育の速さが均一で、耐病性もつけやすいなど栽培しやすい、収穫された野菜の大きさや風味も均一で、単位面積当たりの収量も大きいので、大量生産や大量輸送に向いている。しかし一方で、「F1品種」から採種されたF2世代の種は、今度はメンデルの「分離の法則」によって、優性形質3に対して、1の割合で劣性形質が現れるために一部が親とは違った形質となってしまう、形や味が均一にならなくな



温海かぶは甘酢漬けにして売られている

る。従って、「F1品種」の野菜を作る農家は、種を毎年種苗会社から購入して栽培している。これに対して伝統野菜は、生育時期や形、大きさなどが揃わないなど、栽培に手間が掛かったり、均一さが前掲とされる流通に向かない。一方でその土地の気候風土に適応して、何世代にも亘って生き延びてきた品種であり、地域の食文化として根付いた作物と比べると、F1品種は個性の面からもマイナスであると思う。また、伝統野菜に合った栽培方法など

伝統野菜をどう活用するか

しかし、「F1品種」はすなわち一代限りの品種であり、決してその土地に根付いた作物と言えない。F1品種に押されて、伝統野菜が顧みられなくなると栽培されてきたという面もある。味は個性的かつ多様で、もちろん種は自家採取でき、その種の特性は親と同等である。先に秋田県と山形県の伝統野菜の定義を紹介したが、それぞれ「昭和30年代以前」、「昭和20年以前」から栽培されているものと規定されているのは、この「F1品種」が昭和30年代以降の高度経済成長期に市場を席巻し始めたことと関係があるのではないかと考えられる。大量生産、大量消費の流れの中で、農産物にも

用が進んでいるのは、この温海かぶを含め、伝統野菜の数が東北でも際立って多い山形県である。山形県では既に、平成23年に「やまがた伝統野菜」展開指針」を策定、それに沿って県全体の取り組みを展開している。

この指針では、①山形の特徴ある生産技術・生産環境を維持する基盤づくり、②「山形の宝」としての伝統野菜を「広める」情報発信の強化、③地域の食文化を守り、次の世代に「つなぐ」活動の展開、の3つを伝統野菜の施策展開に係る基本的な考え方として、伝統野菜を、①県外・全国に流通促進していく品目、②地域内需要に対応し、県内での認知度を高めていく品目、③種子の掘り起こし、保存していく品目、の3つに区分する。その上で、①生産の充実・生産量の拡大(需要を満たす生産量の確保)、②流通経路の確立(生産者と実需者との新たな流通形態の形成)、③需要拡大につながるプロモーションの実施、④やまがた伝統野菜の認知度向上、の4つの方向で施策を展開していくとしている。

氏は東洋経済オンラインに寄稿した「特産品で地方創生ができるという『幻想』」の中で、自治体が予算をつけて行う特産品開発において「売れないもの」がどんどん生みだされがちに現状に触れ、そこに、①商品自体が成功商品のコピーまたは「流行」に左右されてしまいがちなもので、強豪の多い商品市場に参入して埋没してしまう、②根拠がないのに「自分の地域のもの」「日本一うまい」などの「勘違い」を前提にしてプロジェクトが進められ、「売れる最終的な商品像」から原材料を選択するのでなく「地域資源だから」といって地元にある原材料から商品を考えてしまう、③「新技術を導入すれば売れる」と「技術頼み」になっ

ていて、それが価格に転嫁することが可能なものなのかを考えていない、の3つの問題点があると指摘している。

いわば品目ごとにアプローチの仕方を変え、可能なものについては特産品として県外に積極的に売り込んでいくというプランである。しかし一方で、特産品で町おこしをという発想に警鐘を鳴らしている人もいる。自身も各地の町づくり、町おこしに当事者として深く関わり、内閣官房でも「地域活性化化道師」として活躍している木下 斉氏である。

自体、簡単なことではない。そもそも、伝統野菜が一般に流通していないのはそれ相応の事情があるからで、それは先に書いたように、栽培の手間であったり、流通経路が確立していないことであつたりするわけである。その事情を考慮していかないと一足飛びに「売れる商品」として活用することは難しいに違いない。しかし、伝統野菜が地域の良さや独自性を伝えられるという、その「メッセージ性」には大いに着目すべきである。例えば、最近仙台でよく食べられるようになった「せり鍋」。せり以外には鶏肉が入っているだけで、まさにせりを味わうためのとてもシンプルな鍋物だが、ここで使われる「仙台せり」は根まで食べられる。ばかりか、根が一番美味しいという人も多く、この、根まで美味しいせり、

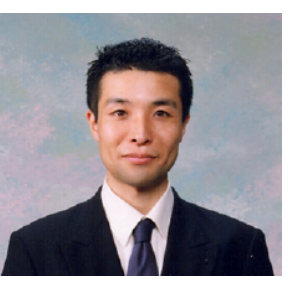
地元でこのような食材があったということを再認識する機会にもなっている。そしてまた、そこには根まで美味しいせりを作るために日夜努力している農家の存在もあるわけである。

幸い、先に挙げた山形を始め、東北は程度の大小はあれ、各県とも伝統野菜に注目し、活用を図っていく途上にあるようである。昨

年は山形県内で「全国伝統野菜サミット」が、秋田県内で「伝統野菜シンポジウムin秋田」が相次いで開催され、それぞれ盛況であつたようである。伝統野菜、それを大都市圏などの地域に売り込んでいくことはもちろん今後の視野に入れてよいと思うが、それに先駆けてまずは、その地域の良さや食文化の多様さを、その地域に住む人自身が再発見する手掛かりとしてこの伝統野菜を活用することを考えたい。

執筆者紹介

大友浩平 (おおくまこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

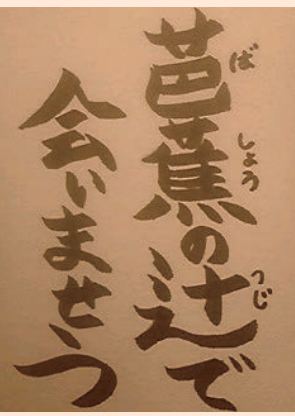


Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo



だだちゃ豆はその味で全国的に知られる

連載
むかしばなし



第二十二話
愛宕山の善助

三つの山が、燃えている。凍てつく昭和三年の冬の夜空の下。仙臺の町には、多くの火が所々で焚かれ、町じゅうの人々が旧正月飾りを焼き、その炎で身を暖める。中でも大きな三つの火が、仙臺城下に大きな三角形を成している。南の火は愛宕神社の鎮座する向山。その頂上に、青年は完全には動かぬ片足を押し登って来ている。

本堂の側の広場で焚き上がるどんと火越しに、彼は仙臺の夜景を見ていた。正月飾りの山の中から燃え



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

かけた一個の大きな松川だるまが彼の足元に転げ落ちてくる。その古びたるまの、カッと見開いた両目と彼の眼鏡の奥の視線が交わった。

「おお、これは恐いぞ…」ふつと気づくと、炎の向こうの街の灯も、周囲に賑わっていた人々の姿も消え去って、明らかに愛宕の社殿ではない、巨石を組み上げた塔のようなものが屹立している。自分と、目の前の炎の塊だけが、別の世界へ跳んだかのようだ。

「石川殿・石川善助殿ではござらぬか。」いにしえ人が尋ね、未来世紀の若者が応える。

「いかに、でがんす。泉三郎・忠衡さん、またお会いできたね。」忠衡と呼ばれた小柄な武者は頷くと、巨大な火に目をやった。

「この火…下からは見え

ませなんだ。」「今は、昭和三年の、正月だったよ。僕がここへ来れたという事は、東照宮と大崎八幡には既に石が置かれたのだね。」

石川善助と呼ばれた青年が平静のまま、言った。「やはり、あの芭蕉やら、宮澤やらいう連中は石川殿が遣わされた…」

「いやいや、僕にそんな大それた力などないよ。芭蕉さんに協力申し上げただけださあ。それにしても、皆さんご無事なものでしょうか。」

「返してはいかん。むしろ、徹底的に魅せるのだ。恐れ

おののかせ、その上で離れ難くさせる。それぞ策なりさ。」

「何を申されておるやら…」忠衡は苦笑した。「そなたら未来人は、何を考えておるのかわからぬ。以前、石川殿は言われた。阿津賀志山で平泉は勝つてはならぬと…」

「三郎さんは、ご立腹だった・・なのに、こらえて下さったのだね。勝てば数百年後、この仙台の都が生まれないのだと、僕の身勝手な言い分であつたのに。」

「いや、三郎さん。大切なのは、西木戸さんが阿津賀志山で国境を示された事ださあ。これで、奥州は救われたも同然という事さ。」

「何か空に上がったね…」女が西の空を見上げて言うので、祝魚も釣られて見た。青葉山の、まだ深闇にならぬ夜空に、上昇する光を追って昇っていく蛇のような影。

「最初に買ったのは俺だからよ？」

「祝魚は咄嗟に言い放った。待て。おめえ、大事な事は忘れてんでねえか？」

「お前はこれのおなごば金で買おうとしたな。だばつて、その金はこの時代では使い物ならねえ。んでねえがこれ！」

「馬鹿だね！この子。」その時だった。一日中、静まり返って眠っていた、八六二〇型の機関車から、突然蒸気が吹き上がったのだ。

「機関車まで笑つてらよ。」見守っていた乗客の一人が言い、周囲にも笑いが起こった。

「機関車が、何故だか熱を持ってきてる。鉄が、ものすごく熱くなつてるぞ！」

「ヤエトという人格が去つてしまった、抜け殻のような女の身体を、芭蕉は毛布で包んでやった。」

「まだ、その人が目覚めると決まつた訳では」

「世界に伝わる、魔王たる存在の怖ろしいところは、こちらの心の、夢と現実の境界を曖昧にしてしまう、麻薬のような力です。私どもが、昭和の時代に帰る事ができ、自宅で床についたとしましょう。ところが、古代の青葉山で落ち葉の上に寝

ていたと気づく。これから先の私どもそれぞれの人生は、全て大天狗の見せる幻かも知れないのです。」

「一服、いいがの。」

「悪路王の末裔だとか、ヤエトさんは言っていたね。ただの気弱な銀行員さんのようだったけれども。」

「それは、イヴェント・ホライズンの事ですか？」賢治が驚いた様子で、サカスの老人を見るので、純三が思わず質した。

「それが、死、の世界という事ですか。」

「霧の間に、段々畑の姿を見ました。穂が実っているように耀いて・・正しく、大天狗の幻だったのかも知

れませんが。」

「芭蕉は少し考える。」

「だが、ヤエト殿・・この方に、一晩付いてやつてくれませんか。」

「芭蕉や賢治の背囊に残っていたアケビの実など、やがて賢治が意を決したように立ち上がるのだった。」

「芭蕉さん方は石を置く路をお進み下さい。私は天界の殺物を分けて頂きに参ります。」

「どうです、分かれて個々が災難に合うよりは、共に同じ災難に対処しませんか。夜は石を置きに行き・・陽が昇ったら天界の殺物を採りに参るといのは。」

「鎌倉の軍は明日には名取川を越えましょう。芭蕉さんは、私に煩わされず向山へ赴き下さい。」

「芭蕉さん、宮澤さんには私がついておられます。どうぞ先をお急ぎ下さいませ。」

「次回予告」

大天狗の支配する、青葉山の長い狂気の夜が始まる・・早く翌朝の大戦も書き始めた作者である、が、結構ここ重要！(だと

シリーズ 遠野の自然 「遠野の啓蟄」 遠野 1000 景より

啓蟄(けいちつ)

二十四節気は、太陰暦の日付と季節を一致させる為に大昔に考案されたシステムで、国内でも明治五年まで使用された太陰太陽暦のひとつ。季節を表現する際によく耳にする。

その二十四節気の第三番目が啓蟄で、むずかしい漢字だが「けいちつ」と読む。「啓」は「開く」、「蟄」は「虫などが土中に隠れ閉

じこもる」の意で、「啓蟄」で「冬籠りの虫が這い出る」(広辞苑)という意を示す。現在広まっている定気法とか平気法とかいう方法によれば3月6日から8日ごろを指すらしい。日本は南北に長いので、

その時期に実際に「冬籠りの虫が這い出る」地域は少ない。その点で、二十四節気の啓蟄は大分先行しているように思える。

三〇センチはあるだろうし、ときどき雪も降る。雪だけでなく、霰(あられ)も降った。とても啓蟄どころではない。冬籠りの虫が外に這い出たら、途端に風邪をひくだろう。遠野はまだまだ冬なのである。

とは言いつつも、春の訪れは感じられるようだ。耳が干切れるような吹雪ももうないだろうし、気温も氷点下二桁という日もめったにないであろう。確実に春は近づいていると思われる。新聞のこの号が発行された時点でさらには春が近づいていることだろう。

書いてあることだろう。言いがたい。しかし、どことなく寒気がゆるんでいるようには感じられる。

遠野の啓蟄とはそうした微妙な季節であろう。遠くに春の足音を聞きながら、身の回りは相変わらずの冬で、少しでも気を許したら寒さに負けてしまう。

掲載した画像の大半は雪の風景であるが、そうした微妙な気配と、冬と啓蟄との間を行きつ戻りつを繰り返す季節を感じ取っていただけだろうか。遠くの山々も雪一面というわけではない。でもときどき冬に戻り、雪や霰が降



落雪



早池峰山



綾織町近辺の白黒青



SL 銀河の試運転



雪を被った狛犬



早朝の境内



霰(あられ)降る

4年目の福島問題を考える

佐藤紀彦

今年3月1日、常磐自動車道が全線開通した。昨年12月に、福島県浪江町の浪江ICと仙台都市圏を結ぶルートは開通していたが、今回、浪江―常磐富岡(同県富岡町)間の区間が供用開始されたことで、太平洋岸でも被災地を経由し、首都圏と仙台圏を結ぶ一本の動脈が完成したことになる。

今回開通した区間は、浪江町・双葉町・大熊町・富岡町を縦貫し、各自自治体の全域が福島第一原発事故に伴う避難指示区域とされるいわき市と南相馬市に挟まれた、これら双葉郡の町については、私も仕事柄、震災前に何度か訪問したことがある。まったく土地鑑がない。

佐藤紀彦(さとうのりひこ) 仙台市在住。不動産鑑定士。出身は東北の田園地帯・浦谷町。趣味は家内との温泉巡り。非寛容・排他主義がはびこる時勢を憂う。

Facebook
https://www.facebook.com/norihiko.sato.509



い訳ではない。しかし、原発事故以降は、訪問する機会もなく、頭の中には、ただ「立ち入りが制限された死の街」又は「猪や野生化した家畜が主となった集落」という極端な心象のみが出来あがっていたくらいもある。被災地の物見遊山を憚る気持ちはあるものの、地続きの隣県のことを、自分の目で見て確かめたいという思いがあり、平日の午後1時に間をとって真新しい高規格道路を南下することとした。

さて、帰宅して原稿を書くこととしたときに、私以外にも、最近、双葉郡の帰還困難区域を訪問した人がいることを知った。購読紙のコラム『終わり始まり』で、池澤夏樹が「それは異様な道だった」と無人の国道6号線について書いている。今回、私は、浪江と常磐富岡の両ICで下道に降り、付近を車で流した。しかし、国道6号線等の主要幹線道路は走行可能であるものの、そこを折れ街区に入る道路には、金属製の柵が設けられるか、通行証・許可証の提示が必要な検問所があり、通れる道は限られている。よって、私の目に入った風景は、きつと池澤氏と似たようなものであったのだろう。道に沿って連坦する店舗や住宅。その

所々に、震災の傷跡が残り、応急的な修繕も施されているため、厳密には、震災直後の風景とは全く同じとは言えない。しかし、表面的には、私も池澤氏と同じく「あの日のままの姿で」、時間が止まってしまった街のように感じた。一つの市街地が、形としては残っているものの、生活者の気配は認められない。また、個々の建物に、簡易なものであっても、金属製の進入止めが設けられ、人の工作物なのに人の受け入れを拒絶しているかのようにも見える。池澤氏は、富岡町の中心市街地を抜けて、国道6号線を北上し、壊れた原子炉から北西方約2キロの地点となる双葉町熊ノ沢辺りまで行ったらしいが、私は時間の制約もあって、そこまでは行かなかった。ただ、「被災地を見る」ことだけが目的であるならば、私はもう、この地を訪問すべきでないとも思った。

福島における放射能禍の問題は、目に見えないリスク要因又は不安との闘いである。先ず、原発事故によって、多くの福島県民の生活基盤が破壊されたことは間違いない。福島県の避難指示区域の人口は約七万九千二百人、世帯数は二万八千四百(何れも平成26年10月現在)とされ、これだけの人がもとの居住地を追われている。そして、低線量被曝と向き合い、折り合いの付け方を学びながら、同じ福島で生活を再建するために、多くの人が苦労を重ねている。しかし、この福島の実情に関しては、原発事故による直接的な被害だけではなく、震災以降の4年間に染み付いた偏見・先入観によって、新たな苦しみが生み出されていることも看過することはできない。それに気づかせてくれたのは最近刊行された開沼博氏による『はじめての福島学』(イースト・プレス社)である。

開沼博氏は、福島県いわき市出身、30歳そこそこの社会学者であり、震災以降、福島大学で特別研究員を務めている。私も、平成二十三年に刊行された『フクシマ論 原子力ムラはなぜ生まれたのか』で名前だけは知っていたが、実際に手に取った著書は『はじめての福島学』が最初である。そして、『はじめての福島学』を読み通して、福島に根を下ろした筆者の苛立ちを強く感じることとなった。

冒頭で、「福島問題の現在」を三ポイントに整理することとして「福島問題の政治化」「福島問題のステレオタイプ化」と「福島問題の科学化」を並べてみせる。このうち、ステレオタイプ化については、私自身にも鋭く突きつけられた意見であると感ぜられる。開沼氏は次のように語る。

「福島の問題は極めて複雑で理解しにくく見える。でも、それを語り続けることが倫理的だと思う人も多く、多くの人が「これで福島を把握した」「これでいい」と思えるようなプラチナ・プラチナ・プラチナ(引用者注)6点セット(引用者注)6点セットとは、福島を語る者に思考停止をもたらすビッグワード「避難」「賠償」「除染」「原発」「放射線」「子どもたち」(のこと)に絞られていき、現在があります。そして、開沼氏は、この6点セットを再生産し続けることにより、善意とは裏腹に、現場で必要とされる議論からは乖離し、ステイグマ(負の烙印)化が進行する前提条件が生まれることを問題視しているのである。

「はじめての福島学」は、入門書のような題名をとりながら、「原発事故」という当初の問題ではなく、その後、福島で発生した二次的・派生的問題を批判の対象としている。開沼氏は、

冒頭で、「福島問題の現在」を三ポイントに整理することとして「福島問題の政治化」「福島問題のステレオタイプ化」と「福島問題の科学化」を並べてみせる。このうち、ステレオタイプ化については、私自身にも鋭く突きつけられた意見であると感ぜられる。開沼氏は次のように語る。

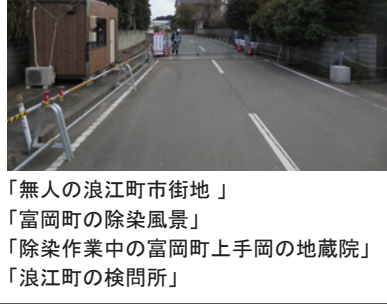
「現実の福島」と「モンスタライズされたイメージ上の福島」。現実としては、震災以降の人口流出が抑制的であったにもかかわらず、「福島の人々はみな放射線に怯え苦しむ、流出しまくっている」という偏見を補完する試算値を公表した研究者に対して、開沼氏は次のように語る。

「実際に、こういう数値を見せられ続けることで、ただでさえ被災者として傷つき、その中で普通に福島に生きる人の中に、自分の生活への誇りを失い、恐怖感や強い抑圧感・負い目を感じて暮らすことを余儀なくされた人も少なからずいました。情報の送り手にはそのようなつもりはなくても、メタメッセージとして、例えば「こんなところに人が住んではいけないんだ」という、そこに生きる人の尊厳を痛めつける情報を受け取っている人がいたわけです。この言葉は、直接的には同じ研究者に向けられたものであるが、私を含め、福島を語る者に対しては強い警告となるものである。

「おわりに」で述べている『福島へのありがた迷惑12箇条』は、正直なところ、ただでいいと思つた。無論、福島の問題を、危機煽りや牽強附会の政治的主張を行うためのネタとして利用するのは論外である。けれども、被災地と接点を持つなかで、私も感じることもあるが、人の善意を、上滑りなのか、的を射ているのかを識別することは、それこそ開沼氏が語る「ウエメセ」的態度に陥る危険性があるのではないだろうか。もしかししたら、私は、開沼氏の苛立ちからは離れたところに在るため、この点に關しては共感度が低いのもかもしれない。だが、この本自体が、福島問題への絡みにくさを解消するという問題意識で書かれているにもかかわらず、最後に、福島への関わり方の場面で、困いを高くしてしまうのは、勿体ないように感じたのである。

地続きの福島で起きている現実。開沼氏が、その著書で語るように、「過剰に危険を煽るのは間違っている」と口にするれば、陰湿な嫌がらせを受ける。他方で、雁屋哲氏が『美味しんぼ「鼻血問題」に答える』で語るように、「低線量被曝・内部被曝の危険性」を題材として取り上げれば、「非国民」の誇りを受ける。この両極が過熱した不幸な言論状況の中で、徒に流されないようにするためには、日々アップデートされる情報を取捨選択し、体系化しつつ、確固たる知見を得ることが重要であろう。開沼氏は、福島のために(他県の人間が)何かしたのであれば、「買う・行く・働く」の三つしかないと思つていながら、私はもう一つ、適切な知見を得るため、4年目の今であるからこそ、「考え続ける」を加えて欲しいと思うのである。

(お詫び) 前回の投稿で、福島県の甲状腺がんについて、地域住民の医学的調査が見送られている旨を書きましたが、事故当時18歳以下だった約38万5千人に対しては、生涯に亘り、甲状腺がんの超音波検査を続ける計画があるとのことでした。不確かな情報を書きましたことを心よりお詫び申し上げます。



「無人の浪江町市街地」「富岡町の除染風景」「除染作業中の富岡町上手岡の地蔵院」「浪江町の検問所」

笑い仏さん、神奈川県滞在中

神奈川県平塚市一相模川の近くにある浄土宗の**正安寺**
毎年3月11日、東日本大震災の物故者の追善法要実施
2月開催の涅槃会で『笑い仏さん』をお披露目しつつ、
あらためて、今年4年目を迎える東北被災地の話をする

MONKフォーラム代表 長谷川稔氏
平原憲道氏 寄稿

笑い仏さん

福島への行脚

第十八回



涅槃会



正安寺

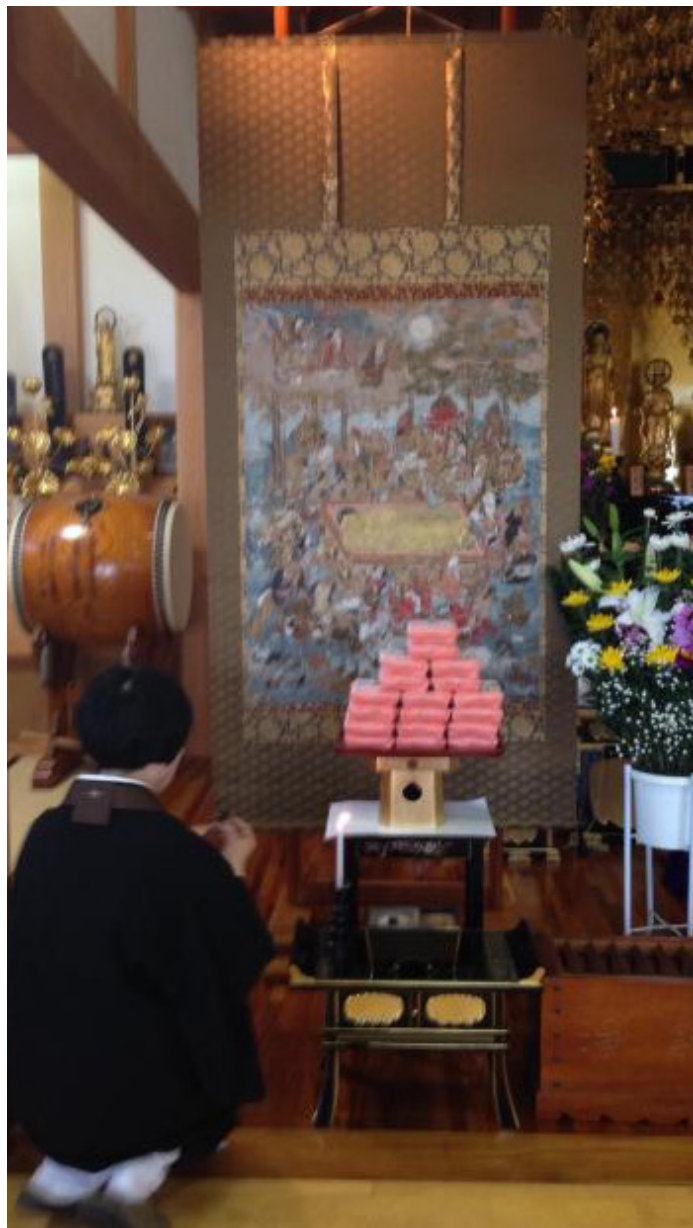
原発被害と闘う福島県を
目指して進む「笑い仏」
は、いま神奈川県平塚市に
ある正安寺に逗留していま
す。このお寺は、神奈川県
の相模川の近くにある浄土
宗のお寺です。2月15日に
は、お釈迦様の命日を偲ぶ
涅槃会が行われました。そ
のときの様子を、酒井住職
の奥様である和香さんにか
がいました。

涅槃会というのは、お釈
迦様が亡くなったことを偲
ぶ法要で、この大事なイベ
ントでは、お寺に伝わる大
きな涅槃図を掲げます。
この涅槃図は、お釈迦様
の入滅する様子を描いたも
ので、江戸時代に描かれた
という由緒あるものです。
ただ、それが発見されたの
は本当に偶然だったのです
よ。

本堂を修理しようという
ことで、建物をクレーンで
引き上げたところ、何やら
ボロボロの巻物が一緒に見
つかつて。はじめは、何が
描かれているかもわからな
かったんですよ。それを檀
家さんの力を借りて修復し
今日見られるような立派な
涅槃図に復元できたのです。
涅槃会では、和讃という
ものを歌います。住職が念
仏を唱え、みなさんはそれ
に合わせて歌ったり、鈴を
鳴らしたり、鉦を鳴らした
りするんですね。合わせる
のが、難しそうですね。？
そのために、楽譜のような
ものをお渡しするんですね
印がついていて、バツのと
ころで鉦を鳴らしたりね。
涅槃会が終わると、「笑
い仏」さんのことを皆さん
に紹介させてもらいました。
どのような経緯でここに
おられるのか。2年前に鳥取
を出発して、ここまで来ら
れて、今年の8月には福島
に入られるってことをね。
みなさんいろいろ感じら
れていましたよ。

「震災からもう4年にな
るのかあ..」
「あのときのショックと
いうか、気持ちというもの
は少し忘れてしまったかも
ね。反省しないとね..」

「何か、東北にできるこ
とはないかな？」



涅槃図

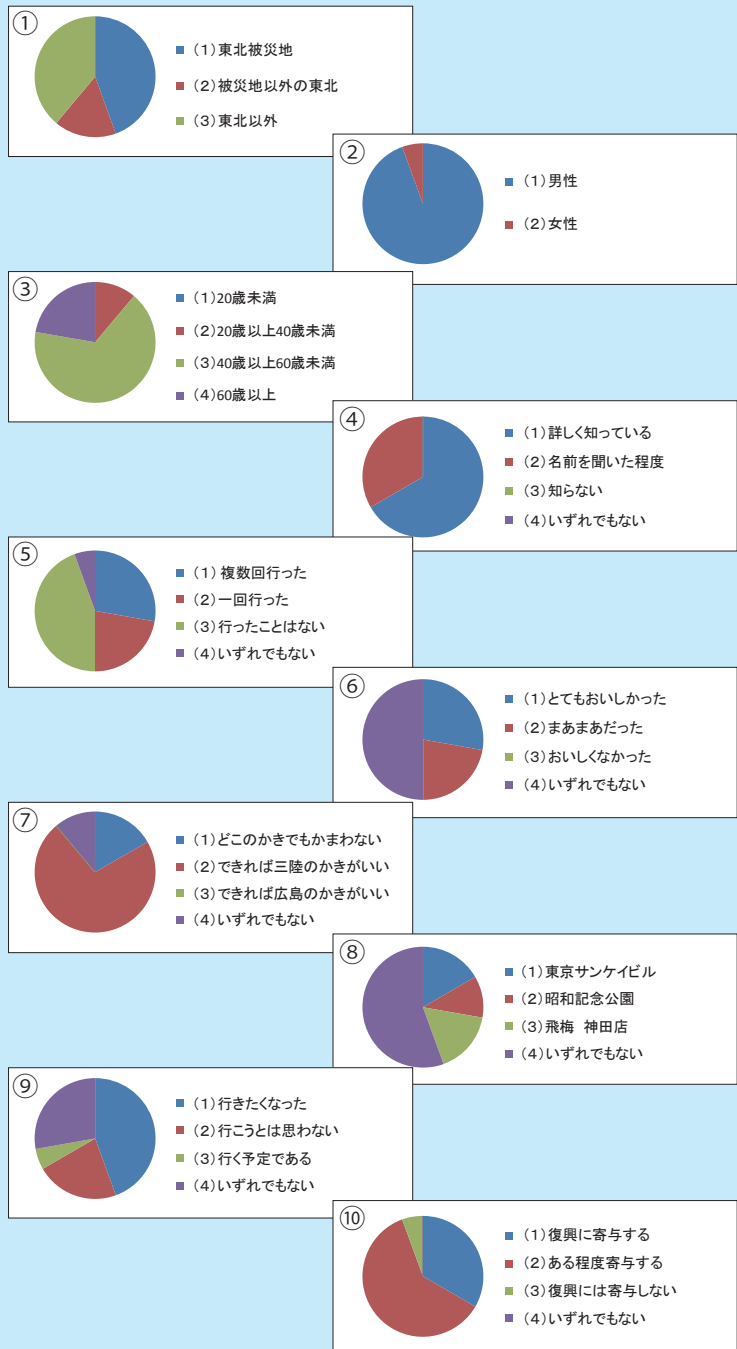
お茶を飲んでるとき、
いろいろな話が出ました。
私たちもお寺の人間として、
震災当初は、檀家さんにも
お願いして、寄付を集めた
りしていました。息子の副
住職も、前に「笑い仏」が
おられた浄源寺のご住職と、
被災地に音楽を演奏しに行
つたりもしました。
被災された方も近所にい
らして、親類を頼って住ま
れていたんです。その方か
らは、大変な思いをされて
いることを教えて頂きました。
その方にも、もうお会い
することはなくなったので
すが、無事に東北に帰るこ
とができたのでしょうか..

「笑い仏」さんが、この
お寺に来てくれたことで、
再び東北のことを考えるき
っかけになったことはよか
ったと思います。3月11日
には、当寺では毎年、東日
本大震災の物故者の追善法
要を行っております。その
前に、「笑い仏」さんをお
招きして、みなさんとお話
してきたことは、とてもよ
かったと考えております。
◇
「笑い仏」は、正安寺に
4月上旬まで逗留予定です。
また、お寺では3月21日に
春分彼岸会を行う予定です。
盛大な法要をされるのこ
とですので、1度足を運ば
れてはいかがでしょうか？
正安寺
神奈川県平塚市大神
2045
ご参拝の際は1度、お電
話ください。
電話0463(53)2495
神奈川県平塚市平塚
北口」から「本厚木駅
南口」行きバスで、「寄
木神前」下車(約20分)。
そこから新幹線渡って徒
歩約5分。

第33号 ネットアンケート集計結果

【「かき小屋」について】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	8
	(2) 被災地以外の東北	3
②	性別	
	(1) 男性	17
	(2) 女性	1
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	2
	(3) 40歳以上60歳未満	12
④	「かき小屋」を知っていますか？	
	(1) 詳しく知っている	12
	(2) 名前を聞いた程度	6
	(3) 知らない	0
⑤	「かき小屋」に行ったことがありますか？	
	(1) 複数回行った	5
	(2) 一回行った	4
	(3) 行ったことはない	8
⑥	「かき小屋」のかきはどうか？	
	(1) とてもおいしかった	5
	(2) まあまあだった	4
	(3) おいしくなかった	0
⑦	「かき小屋」ではかきの産地にこだわるか？	
	(1) どのかきでもかまわない	3
	(2) できれば三陸のかきがいい	13
	(3) できれば広島のかきがいい	0
⑧	記事で取り上げたかき小屋を知っているか？	
	(1) 東京サンケイビル	3
	(2) 昭和記念公園	2
	(3) 飛梅 神田店	3
⑨	記事を見て「かき小屋」に行きくなったか？	
	(1) 行きなくなった	8
	(2) 行こうとは思わない	4
	(3) 行く予定である	1
⑩	「かき小屋」と復興との関係	
	(1) 復興に寄与する	6
	(2) ある程度寄与する	11
	(3) 復興には寄与しない	1
	(4) いずれでもない	0



今回は「かき小屋」について、三陸の牡蠣シーズンを迎えて東京圏で多くの「かき小屋」出現。当新聞で三陸水産復興の象徴として、牡蠣事業を取り上げてきたので、最近の「かき小屋」ブームについて、今後の参考のため実施した。回答者は十八名。

「かき小屋」を知っているか？は「詳しく知っている」が約66.7%、「名前を聞いた程度」は約33.3%。「かき小屋」に行ったことがあるか？は、「複数回行った」が約27.8%、「一回行った」が約22.2%、「行ったことはない」が約44.4%。その結果、「とてもおいしかった」が約27.8%、「まあまあ」が約22.2%。「かき小屋」ではかきの産地にこだわるか？は、「できれば三陸のかきがいい」が約72.2%、「どのかきでもかまわない」が約16.7%。「記事で取り上げたかき小屋を知っているか？」は、「東京サンケイビル」と「飛梅 神田店」が約16.7%、「昭和記念公園」は約11.1%、「すべて知らない」が約55.6%で知名度は低い。「記事を見て「かき小屋」に行きくなったか？」は「行きたくない」が約44.4%、「行く予定」が約5.6%、「行こうとは思わない」も約22.2%とは思わないも約22.2%。「かき小屋」と復興との関係」は、「ある程度寄与する」が約61.1%、「復興に寄与する」が約33.3%となった。

編集後記

三月は東北大地震発生から四年目というところで、たくさんさんのTVや新聞各社、その他メディアが特番を組んだり、特集号を出した。あらかじめ入念な企画を立てて特番、特集号を用意していたのだから、どの局も、どの新聞も、どのメディアも、定番の形式だった番組作りと記事づくりであり、それらを山ほど見せつけられるとさすがに閉口してしまう。感情が上滑りして、そして何か空々しい感じがしてさみしくなってしまうのを止められない。まるで何とか記念日のように、記念日以外にはほぼ触れることがないのに、その日が近づくと一斉に騒ぎはじめ。そしてその日が過ぎれば、祭りの後のようにひっそりとする。これをもう三回も繰り返してきた。「大震災を忘れない」という言葉もあまり好きになれない。かつて流行った「絆」にも似て、無理やりブームを作り上げよう、型枠に無理やりはめ込み、一定の感情を押しつけようという匂いがぶんぶんして好きになれないのだ。

一方で、こうした「ブーム」とは無関係に、被災地現地では怒りと悲しみが渦巻いているようだ。このギャップをどう解いていったらいいのか、当新聞も考え続けていかなければならない。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先
(郵送) 〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1
ホームタウン宮前2-2
電子タプロイド新聞【東北復興】宛
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと思ひます。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています